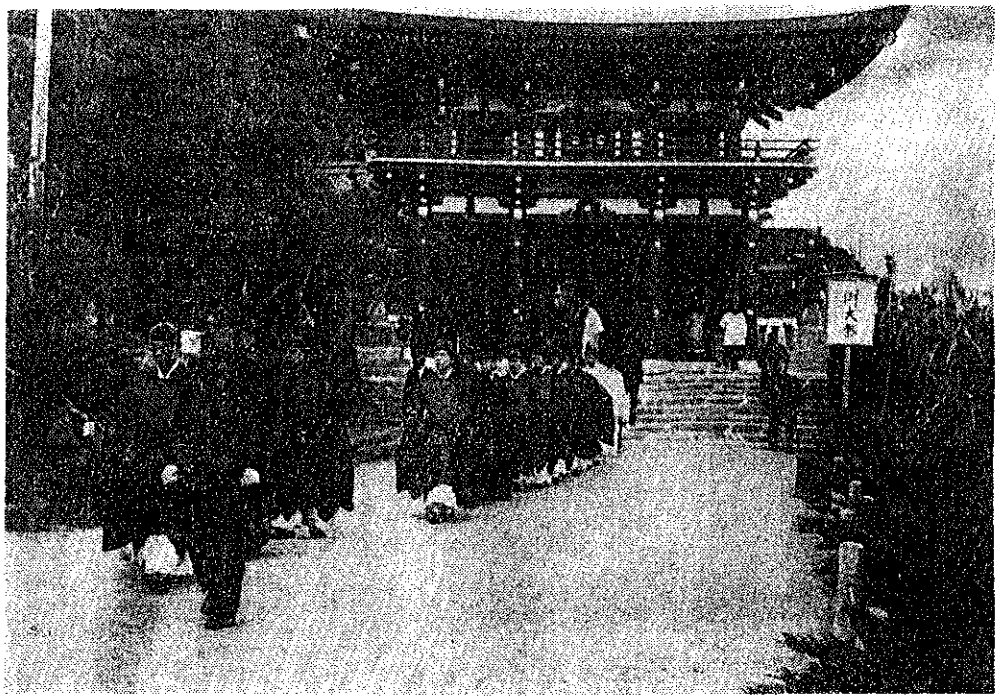


一祭　例一

鵜戸

発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷

ごあいさつ

宮司　長友安美

若葉のみどりのみずみずしい季節となり、氏子・崇敬者の皆様には愈々ご清適にてお過しの事と存じ上げます。

去る二月一日の当神宮例祭には、ご祭神みゆかりの四神宮（英彦山・霧島・鹿児島・宮崎各神宮）の宮司様を始め、役員・総代、県内外の神職の方々、氏子、崇敬者等のご参列をいただきまして有難うございました。お陰を以ちまして、祭典が盛大かつ厳粛に執り行うことができましたことは、まことにご同慶に耐えないところであります。また奉祝の諸行事も天候に恵まれ、滞ること無くお祝い申し上げ得ました。紙上より、ご苦労いただきました関係の諸氏に厚く御礼申し上げます。

さて、目を現今の社会情勢に転じてみますと、まことに憂うべき事がらの続発であります。その最たるものは、成田開港の問題であろうと思います。先日は反対派が空港の管制塔を徹底的に破壊し、さらには航空交通管制部の管制回線を切断するというような暴挙をやらかしました。これら事件が、開港の何カ月か後に起こったとしたらどうなっていたことでしょう。おそらく空中の飛行機は着陸する場所を失い、大惨事を招いたことでありましょう。

地球上の全んどの国々は、法治国家であります。法治国家としての日本の信用が、世界の国々から問われている今、私たちは社会生活の規範を暴力で壊しにかかる輩に、鋭い監視の目を片時も怠ってはならないと考えます。

このように多事多難な状況下において、私共は着実な神道教化活動を続け、人々の魂を浄化する重責を全うすべく努力を致したい所存でございます。

例祭を斎行

去る二月一日、当神宮例祭は盛大かつ厳粛に斎行された。寒い天候にもかかわらず、献幣使に甲斐武教氏（県神社庁長）を迎えて執行された祭典には、責任役員、氏子・崇敬者総代をはじめ、宮公衙、敬神婦人会代表、また英彦山神宮、霧島神宮、鹿

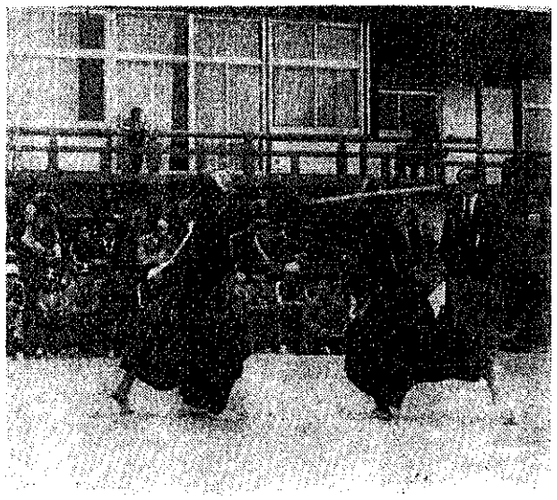
児島神宮、照国、松原、都農、青島、狭野、神社の各神社宮司など約二百名の参列があった。

一方、儀式殿前広場では、第七回鵜戸神宮奉納四半的大会が開催された。熊本県天草チームをはじめ県内各市町村より一般六八チーム、老人二九チーム計九七チーム四八五名が参加し、午前九時開会式。そして当宮神職による射始式の後、一斉に的めがけて射はなち、技を競った。今大会各部の優勝は次の通りである。

〔団体の部〕
一般　桜ケ丘Aチーム
老人　飫肥老人チーム

〔個人の部〕
一般　岡崎　勉（桜ケ丘）
老人　上田辰身（酒谷）
女子　矢頭民江（新和）

また、例祭当日とは違い好天に恵まれた日曜日の五日には、第二十六回剣道発祥鵜戸山顕彰剣道大会（主催剣法発祥鵜戸山顕彰会、主管県剣道連盟日南支部、後援鵜戸神宮、西日本新聞社など）が開催された。大会には選手役員約二千人が参加し、多数の観衆の声援を受け、小、中学校、高校、一般に分かれ終日熱戦が展開された。剣道大会の優勝は次の通りである。



―写真上下熱戦をくりひろげた剣道大会―

〔男子〕
小学校　神武館
中学校　興武館
高校　宮崎中央高校
大学一般　宮崎北警察署

〔女子〕
小学校　高師久美子（至誠館）
中学校　原美佐緒（神武館）
高校一般　村岡ひろみ（神武館）

こどもの日に
いさみ太鼓奉納

今年のゴールデン・ウイークはあいにく連日雨が降り続いていたが、こどもの日恒例の鵜戸さんいさみ太鼓は、小雨の間をぬって、五月五日当宮神門前広場において、氏子をはじめ、多数の参拝者の見守る中で盛大に開催された。

鵜戸さんいさみ太鼓は、怒濤の如く磯に打ち寄せる太平洋の荒波を脳裏に描き、一昨年子供の無病息災を祈念して創案され、子供達の結束と自主性を高めるため、昨年氏子の小学生を中心に、いさみ太鼓子供会を結成したものである。会員は神の恵みと祖先（親）の恩とに感謝し、明るく、清く、直く、正しい真心を養うを目的とし、現在、神社本庁、神道青年協議会の活動目標である、青少年教化育成問題と照らし合わせ、当宮でも教化活動方針の一つとしている。日南海岸に点在する部落に住む会員は各部落の公民館を主に練習を重ね一段と腕を上げ発足時六五名だった会員は先輩会員の情熱にうたれたのか今では七五名の大世帯となった。

―いさみ太鼓―

当日は、早朝激しく雨が降っていたが、八時過ぎようやくあがった。多数の会員以外の子供達の参加が予想されていたのだが、この雨の影響で少々予想を下回り会員八二名と一般参加二十数名計百名近い参加者であった。それでも子供達は、連日の雨を吹き飛ばすような勢いで元気に集合、一日を楽しく過ごそうと張りきっていた。九時節句祭が終了すると御殿前に集合した子供達は、お祓いを受けた後、子供会副会長奥村孝徳君の先達に合わせ、全員大声で祈念詞を奏上した。〃いさみ太鼓はじめませー〃という掛声で太鼓の奉納がはじまり、太鼓と共に獅子舞、鈴、扇、竹拍子も一斎にその技を披露した。

その後、参道を兼ねた神門前広場に会場を移し、氏子をはじめ大勢の参拝者の見守る中、いさみ太鼓、獅子舞を次々に披露、勇壮な姿に皆胸を打たれ感動している様子であった。

こどもの日を一日中いさみ太鼓で過した子供達は、これを契機に明日への希望を胸に抱きながら、勉強に運動に励むことであろう。

なお、今年のいさみ太鼓子供会の予定は、七月富士海水浴場開き、八月御神幸祭、九月敬老の日運動会、十月飫肥城まつりとなっている。

氏子総代の異動

氏子総代を委嘱します

三月一日　鶴田政義殿
四月一日　安藤喜俊殿

新総代の鶴田氏は、前総代の横内守氏のあとを受け、また安藤氏は、永年に亘り氏子総代としてご奉仕された今井重市氏のあとに委嘱されたものである。

今回辞められた今井氏は多年、氏子総代会長としてまた当神宮宮大工として、唯ひたすら神宮運営にご助力頂いて来たのであるが、少しく目を悪くされたために辞任されたものである。なお去る四月一日、このご奉仕に対し宮司より感謝状と記念品が送られ、労をねぎらわれた。

今井氏には、今後共増々ご健康で長生きされ、氏子としてご協力賜りますようお願い申し上げます

職員異動 (7)

一月十日　雇を命ずる　横内守
一月三十日　定年に依りその職を解く　権祢宜田中嘉孝
二月四日　願いに依り其の職を解く　巫子荒川智美
二月十八日　斎女を命ずる　巫子松田るみ子
三月二十日　巫子見習を命ずる　芳野ケイ子　奥村良子
四月二日　願いに依り其の職を解く　斎女松田るみ子
四月二十日　願いに依り其の職を解く　斎女金丸三喜子
四月三十日　願いに依り本職を免ずる　祢宜香取辰夫

ヨーロッパ駆け足 (2)

権宮司　佐藤美春

昭和五十二年

九月三日（フランス）

パリはフランスの政治、経済、文化の中心地である。外国の侵略、たび重なる政変による栄光と苦悩の時をくり返して来た興味深い歴史を、駆け足であるが街のいろいろの建物に、そしてさまざまの芸術にしのぶことが出来た。

パリは、まことに世界の文化を生みだす洗練された都会である。

夜になり、パリの華やかな状を見んと、午後九時からフランスの伝統的なショーで有名なムーランルージュに出かける。食事付きである。社交ダンスをやる時間も含まれている。満員であった。婦人は着飾り、男子もノーネクタイはエチケットに反するという。このムーランルージュ行きをみんな考えていたのか、ジーパン組もこの時ばかりは派手に身なりもつくり、耳飾りなどつけて参加していた。着物組も四、五人いて着物が外人の目を引いた。家内もその中の一人であった。

ショーはさすがであった。その洗練された踊り娘達は、年に二日位しか自由の休みが無いという。それでいて三回もミスをすると、たちまち檀舞台から降ろされてしまうという。彼女等の誇りと、その裏のきびしい精進に感嘆した。ショーは午前零時半にすんだが外には午前一時からの次のショーを見る人達が列を作って待っていた。

フランスでもう一つ心に残ったのは、バスガイドである。日本のバスガイドの様にざっと考えていたのであるが、フランスでは国家試験でその職に就くという。歴史、文化、芸術なんでも説明出来なければならない。今フランスに、この国家試験にパスした日本人のガイドが男一人、女一人いるという。私等を案内した人は、その一人で日本名を立花文子さんであると紹介され、一同その心意気に強い称讃の拍手を送った。

宿に着いたのは、午前様の一時半であった。告知板に明日は五時起床、五時半トランク集め、六時出発と張出してあった。なかなかの強行スケジュールである。

毎朝ベッドサービス料が要る。おっと早合点の誤解してはいけない。部屋掃除のおばさんにやるのである。明朝の出発は早いため、サービス料を渡すのを忘れては、日本人の悪い印象を残してまずいと思い、二フラン（一二〇円）を枕の下に入れて休む。

九月四日（イギリス）

五時起床、五時半に荷物を出して朝食。六時バス集合。時刻に若いカップルが現われなかったが、そのまま出発した。イギリスの飛行機が、ストライキで飛ばないかも知れないが、七時までには空港まで来て貰いたいとの約束であった。心配した飛行機は遅れたが来た。寝坊した若いカップルも搭乗時には間に合ったが、受付時間に過ぎていたので、後便にまわされることになった。空席は有ったのであるが融通はきかなかった。そこで四、五人のグループが降りて、その代りに若いカップルを親切に乗せてやった。

―英国国会議事堂を背にして―

飛行機は無事ロンドンに飛んだ。バスで広大な公園・ハイドパークを通り、テムズ河畔に出る。対岸にそびえる国会議事堂の全景を眺める。これは一八五二年の完成で、ゴシック風の建築である。ビクトリア塔を左に、時計台を右に、そのまことに壮大な状は当時の大英帝国の威風を如実に示している。

バスはロンドン名物の、ネルソン提督の記念塔のそびえる海戦勝利を記念する広場で、四頭の大きなライオンの像のあるトラファルガ広場を通って、英国王室のバッキンガム宮殿に行く。女王様がお留守であったので、大望の名物の衛兵の交代儀式はなく残念であった。バスはかつて王城であったセント・ジェムズ宮殿の前を通った。門前には中世王朝をしのばせる赤い制服の騎馬の衛兵が立ち、観光客のカメラが集中していた。

中食は中華料理であった。ここで、若いカップルに代わって一便おくれた四、五人のグループが追いついた。午前の観光が出来なかったのは、気の毒であった。

午後、テムズ河のほとりのロンドン塔へ。入口では持物の検査がきびしい。ロンドン塔は一〇七八年、ノルマンジー公ウィリアムによって建てられた古城である。エリザベス一世時代には、牢獄として使われた暗い歴史をもっている。処刑場の跡、流血の牢門がその昔を物語っている。現在は王室の儀式に使われる調度品が展示されている。なかでも、王冠や世界最大のダイヤモンドを見た時は、みんな足が釘付けになり、目を皿のようにして見入ったことであった。制服の警備員が二人いて、「ストップ、ノウノウ」とやかましく言う。この室は大金庫式になっていた。この塔で日本人の東北の団体に合う。「今日は、今日は」。このロンドン塔のすぐそばにロンドン橋や、ゴシック風の塔を持つ巨大なはね橋がある。河には栄光の軍艦が繋がれていた。

次に大英博物館へ。世界最大のスケールで、ギリシア、エジプト、ローマをはじめ、文化史を知る上での貴重な品々が展示されている。エジプトの象形文字を解くロゼッタ石、ミイラ、アテネ神殿の浮彫、イギリス憲法の根拠となったマグナカルタの写し、切手や手紙類に至るまでの展示品は、さすがかつての大英帝国の威光を示す膨大なコレクションである。

ロンドン泊り

ホテルで私等は、階も室もみんなと離れたところで、隣り近所はみんな言葉のわからぬ、毛色の変った人等ばかりであった。エレベーターに乗ったら、後から紳士が二、三人入って来た。家内を見たとたんに、帽子を一寸とって、笑顔で敬意を表した。家内は笑顔で頭を下げた。私も笑顔で会釈をした。ヨーロッパの男性は婦人に敬意を表して大切にするというが、一行のバスの乗り降りにしても婦人には運転手が手を借して、いかにもすんなりやっていてキザでない。日本の男性は気持はあっても、まだまだ亭主関白ですんなりとはいかない。

夕食の飲み物は自分持ちである。ジュースもワインと同額であった。婦人組が間違いじゃないかと尋ねたら、間違いじゃないといわれて、顔を見合せていた。

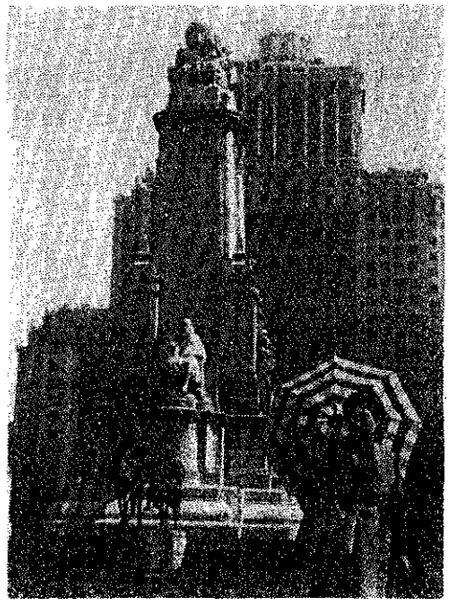
九月五日（イギリス）

朝食は例の如く、パンにジャム、バターとコーヒー、あるいは紅茶である。家内が持って行った味噌漬を出したら、思い掛けない日本の味に所望者が多く、たちまち容器は空になった。

午前中、バスでロンドンの西三十四キロメートル郊外にあるウインザ城へ。ここはテムズ河の上流に建つ、歴史を誇る美しい離宮である。中世の城壁に囲まれて童話のお城の様である。ちょうど三十人ばかりの、人形の様な制服の衛兵が楽隊に合せて交代する状が見られた。女王様は一年の大半を、このお城でお過しなさるという事である。お城の中には武器や甲冑が展示され、また歴代の王様の使用された十余りの由緒ある室は、設計、彫刻、飾り、絵画、調度にと、その豪華絢爛さは、ただ目を見張るばかりである。

お城への途中、住宅の屋根に小さな煙突がたくさん付いているのが目につく。この煙突の数が部屋数であるという。

お城の見学はお昼前にすんで、三時まで自由行動となったので、Uさん、Sさん夫妻と六人で、博愛を示すというエロスの記念碑のある賑やかなピカデリーサーカスに出てみることにした。ここに日本料理屋が一軒あったので、腹の虫を喜ばせた。それから、世界中の観光客のひしめく大通りに出て少し行ったところで、後から若い金髪の女性が突き当たり、ニッコリほほえみ乍ら、すみませんといった様子で前へぬけて行った。しばらくして内ポケットの財布が無いのに気がついた。引率者から、「くれぐれもカッパライに御用心。」と言われていたのに。さてはと思ったが、イギリスのお金を入れていた封筒はすられないで、その下のドルを入れていた財布をすられるのはおかしい?。料理屋ではズボンの内ポケットから日本紙幣を出したのだから、あそこではない。落したとも考えられない。ひょっとして、ホテルで出掛けにポンド（一ポンドは日本円で約五二〇円）を交換した時に窓口に忘れたのかも知れない。しかしそうであったとしても、夕べUさんが食堂に忘れたカメラは出なかったから、駄目であろうと思ったが、出ないで元々と、引率者から尋ねて貰ったら、そこにあった。窓口の交換嬢が正直な人であったので幸いであった。嬉しくなって支配人に「サンキュー」と握手し、心ばかりのお礼をする。



―ドン・キホーテの像の前で―

夜八時、ロンドン出発の予定は、飛行機が来ず一時間が二時間となり、三時間となり、スペインのマドリードのホテルに入ったのは、午前二時すぎであった。

九月六日（スペイン）

午前中マドリード市内見学。まずプラド美術館へ。ここはゴヤを堪能する美術館で、パリのルーブル美術館と並んで世界的に有名である。王室のコレクションをはじめ、現在はルネッサンスから新古典主義までのスペイン絵画を筆頭に、ヨーロッパ各国の名画三千点余を展示しているという。ベラスケス、グレコ、ダビンチ等世界の傑作が、美の真髄を見せてくれる。

次にレティロ公園へ。ここはプラド美術館の裏手にある広大な庭園である。アルフォンソ七世の彫像を映す、美しい池がある。

スペインの貨幣はペセタで、一ペセタ約三・五円である。

バスは王宮前を通って、高層ビルの並ぶスペイン広場に出る。ここに、ドン・キホーテと従者の像がある。スペイン人セルバンテスの小説の主人公で、妄想に陥り、やせ馬にまたがり、従者のサンチョ・パンサを伴って騎士修業に出掛け、いろいろの滑稽と冒険とを演じたという愉快な男である。

広場の木陰のベンチには、市民が平和にゆったりと腰をおろしていた。なかには仲のよいチュウ組もいた。

× × ×

社務日誌抄

昭和五十二年
十二月十九日
初詣参拝者整理の件につき打合せ会（社務所）日南警察署、宮崎交通、鵜戸漁協、交通指導員、日南市役所、地元区長、当神宮の関係者十六名出席
神道青年会出席のため宮司、職員六名宮崎市出向
十二月二十五日
大正天皇御陵遙拝
十二月二十六日～二十八日
当神宮役員、総代関係者へ年末の挨拶に出向
十二月二十七日
煤払祭
十二月三十日
大祓
昭和五十三年
一月一日
歳旦祭
宮中に賀表を奉呈する
一月二日
初日供祭
一月三日
元始祭
一月五日
縁日祭
一月九日
正月飾餅、奉納餅を老人ホームなど四カ所に撒下
一月十一日
陸上自衛隊幹部学校長陸将坂本力氏参拝
一月十六日
古神符焼納祭
一月二十三日～二十四日
九州地区別表神社宮司会（於長崎県）に権宮司出席
一月二十四日
京都大学教授会田雄次氏参拝
神道青年会南那珂ブロック会の日の丸パレードに職員参加
一月二十五日
最高検察庁公安部長検事石井春水氏参拝
一月三十一日
例祭前夜祭
二月一日
例祭　約二百名が参列
奉納四半的大会開催
夕刻より恒例の下中村部落、風田部落の歌合戦を終夜執行
二月二日
哲平山上御陵祭
二月三日～四日
九州地区神背研修会（於熊本県）に職員参加
二月五日
第二十六回剣法発祥鵜戸山顕彰剣道大会開催
二月六日
広島東洋カープ古葉竹識監督他選手五十五名プロ野球必勝祈願祭
二月七日
鹿児島市松原神社宮司岩切実之氏参拝
二月十日
縁日祭
二月十一日
紀元祭
二月十三日
旧広島藩主浅野長愛氏参拝
稲荷神社例祭執行
二月十七日
祈年祭執行
二月二十日～二十七日
神政連東南アジア研修旅行に職員参加
二月二十二日
九州地区敬神婦人連合会一行参拝
宮崎県神道青年会ヨーロッパ宗教文化事情視察に職員参加（三月十日まで）
二月二十四日
福島県神社庁巡拝団参拝
二月二十七日
読売巨人軍正力オーナー長嶋監督必勝祈願祭
三月一日
月次祭
三月六日
縁日祭
三月九日
責任役員会
三月十日～十一日
神青中央研修会（名古屋）に職員参加
三月十五日
皇学館高等学校教員生徒三五二名参拝
三月二十一日
春分祭執行
鵜戸地区戦没者慰霊祭奉仕
三月二十五日
山梨県神社庁副庁長小野信秀氏他参拝
三月二十七日
イギリス駐日大使夫妻参拝
大県神社祢宜飯田清春氏参拝
三月三十一日
宮内庁京都事務所次長北村弘氏参拝
四月一日
月次祭
四月三日
神武天皇御陵遙拝
四月十一日
天皇皇后両陛下御参拝記念祭・縁日祭
四月十二日
千葉香取神宮式年神幸祭奉仕のため職員出向
四月十八日
東京都神社庁副庁長萩原俊夫氏参拝
四月二十六日
小林市老人クラブ参拝
四月二十七日
責任役員会
四月二十八日
氏子崇敬者総代会
四月二十九日
天長祭
四月三十日
自動車祓所鎮座記念祭
五月一日
月次祭・蟗除祭
五月四日
皇太子同妃両殿下御参拝記念祭
五月五日
節句祭・縁日祭
鵜戸地区子どもがいさみ太鼓を奉納
五月六日
御衣祭
参議院議員田代由紀男氏参拝
わたつみ友の会々長鴨志田恒世氏参拝
五月七日
当宮敬神婦人会総会を開催（儀式殿）
五月八日～九日
神道青年九州地区総会、九州地区神職総会に職員出向
五月十七日
曇祖太鼓事務局長黒河省二氏参拝

タイ国訪問私感

権祢宜　本部雅裕

厳寒の東京から、約八時間も飛行機に乗れば、ここはもう熱帯である。機上からは、遥かにうねりくねったメナム川が銀色に光って見え、永年の自然の力によってできた緑の田畑が広々と拡がっている状は、狭苦しい日本のそれとは比ぶべくもない。機首を下げさらに地上に近づくにつれて、白く輝やいていた河は、実は茶褐色の流れである事が分かる。タラップを下り、空港に降り立ってみると、吹く風は熱帯特有の湿度を過度に含んだ南洋のそれであることを膚が敏感に感じとるのを覚える。

ここは赤道の直ぐ北、北緯十三度に位置するタイ国バンコック市のドンムアン国際空港である。

私は、今回の神道政治連盟の東南アジア研修旅行団の一員として、タイとシンガポールの両国を一週間の日程で訪問し、主にその政治・国防、宗教事情などを中心に視察研修してきたのであるが、このレポートでは特に、タイ国の「宗教とそのくらし」などを中心に記してみたいと思う。

タイ国は、敬虔な仏教国である。全国民の九十パーセントが仏教徒であるという。

首都バンコックの街をバスの上から眺めると、街のいたるところに極彩色の小さい祠や、仏像を納めた小塔が見える。それは「小寺院」とでも云おうか、一坪ほどもある広さを持ち、コンクリートや石製で、塔状を成している。屋根や壁、それに柱や床にいたるまで、全て金箔や塗料で彩色されている。四方八方からは、お供物の花や果物が供えられ手厚く信仰されているようである。もちろんその大小はあるが、道の隅々や家敷の角はもちろんのこと、ホテルの入口からガソリンスタンドの一角までにも建立してある。

まるでそれは、我が国の路地に建っているお地蔵さんであるかのように、毎日線香の煙が絶えることがないという。

興味深く思ったのは、仏滅の日学校が休みになるという、いかにも仏教国らしい習慣である。もちろん日曜日も休みである。

おりよく仏滅の日に、トンブリ市にある水上市場へ出かけることができた。子どもたちはめいめいに仏滅の休暇を楽しんでいた。川に飛び込んでは観光客に愛嬌を振りまいたり、あるいは家の手伝いをしたりしている。

水上マーケットは、メナム川とその支流とを縦横に結ぶ運河を中心に開けた町で、果物、菓子や雑貨などを売る家が川に突き出て、その店舗を構えている。あるいはそれらの品々を小舟に積んで売りあるく（漕ぐ）婦人の人たち。これら全ての交通は川に頼っている。

家々は川に向かって建っており、母屋から突き出た渡り廊下の先が、川に面したいわば玄関であり、そこに舟が着くというしくみになっている。またこの玄関は、ときには台所、洗面所、あるいはご婦人方の井戸端会議の場所にもなったりする。というのは、この場所は米や野菜を洗ったり、また歯をみがき、顔を洗ったりの日常生活の場であり、さらには近所の人々どうしの社交場にもなるからである。

同じく川に面した雑貨商の店さきを、観光用の舟で行き過ぎようとして、何気なく店の中をのぞくと、売物であるらしい雑多な品々の上に立派な国王陛下・皇后陛下の御写真が飾ってあった。そのあと、気を付けて家々の中を伺っていくと、全んどの家には高々と両陛下の御写真を拝することができたのである。

ガイドの説明によると、プミポン国王陛下は国民に非常に尊敬されておられ、また陛下自身、常に国内を巡察して廻り、病気の人に薬を、貧困な人には衣類や食料を与えて民意の安定にお尽しになっておられるという。

また先のタイ国の学生運動が激化し、国立のタマサート、チュラルコン両大学の学生が紛争をおこした際、陛下自身が学生と前タノム政権との調停にのりだし、現クリアンサク政権の誕生に力をそそがれたことは、まだ私達の耳目に新しいところである。

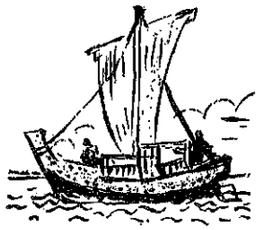
以上タイ国の宗教事情と人々のくらし、特に仏教と国王とを中心としたタイ国民の営みについて、一方的な側面からのみであるかも知れないが述べたつもりである。

ここで翻って我が国の現状を考え直して見なければならない。

憂うべきは、自分の主義主張を暴力によって押し通し、周囲の迷惑を全く考えない輩の横行していることである。これらの連中には社会規範のカケラさえも持ちあわせていないといえよう。また、経済最優先のみが我が国の指標であるかのごとくリーダーシップをとる一部日本人。

タイ国の開発途上にはあるが、脈々と国家建設に励む人々を目のあたりにするとき、我々日本人は、二千有余年間我が祖先が築きあげた永い歴史的遺統と、天皇を中心とした一国家一民族の結束の強い、輝ける精神的基盤を今一度思い起さなければならない。

ともかく現代に生きる日本人は、タイの人々の国王を中心とし、仏教を信じる生活の営みのなかに、日本人の本来あるべき、今は忘れかけてしまった心のささえを見いださなければならない。



鵜戸山散歩(7)

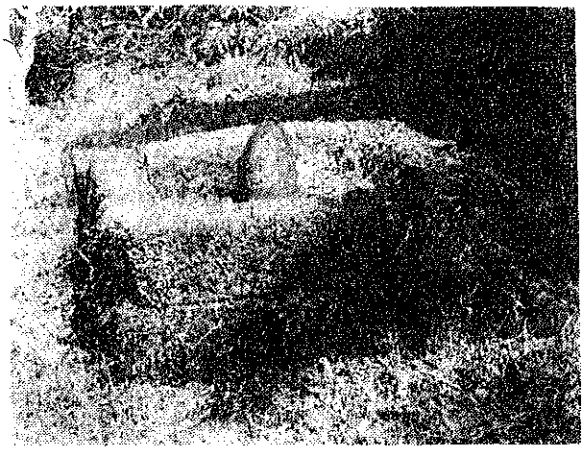
―別当さん―

今回は、当神宮が神仏習合の時代鵜戸山を統轄したという、歴代の別当さんのねむる墓地に散歩してみたい。この墓地は、旧本参道の八丁坂を登りつめた頂上の近くにあり、今はここを訪れる人もまばらである。梅林のなかに苔むした五輪塔や、塔頭（たっちゅう）と呼ばれる特異な石の群が点在している。

当神宮の創始は、第十代崇神天皇の御代とされている。その後、奈良時代の中ごろには百済（くだら）より仏教がわが国にもたらされ、仏教は固有の信仰である神道と、その布教の関係上密接な関わりあいを持つようになった。このため当山にも、仏教がはいり神仏の習合が行われたのである。

一般的に、その習合の前期では仏は神と対立する異質のものとしては考えられず、神の一種としてうけいれられ、『日本書記』などには「隣国客神」と記されて、従来の神（道）とは、新来のカミ（仏）としてのみ区別されるぐらいであった。このように仏教は、渡来の前期において、神道となんなく混合されたのである。当山においては、奈良時代の後期、延暦元年天台宗の僧、光喜坊快久が勅命により、荒廃した神殿、仏寺を再興して勅号を「鵜戸山大権現吾平山仁王護国寺」と賜わったという。この僧が当山の第一代別当である。

別当とは、『延喜式』に「凡そ諸寺、別当を以って長官と為す。」とあるように、一山の寺務に専任する長官で、奈良時代以降大きい寺院に置かれた職名である。



―別当墓地―

この初代別当、快久師は天台宗の僧で、後の別当の記すところによると「師の名は快久、字を光喜坊といい、その姓は不詳。聡明で博識。神廟、仏閣、僧坊の荒廃した当山を再興した。」とあり、歴代別当からは「中興開山」と称され、あおがれた名僧である。

当山は第六代まで天台宗であったが、その後宗旨を真言宗に変え、両部神道の一大道場として盛えたのである。代々の別当は、五十九代の長きに亘り、真言宗本山智積院で学び、仁和寺（今の京都市右京区）で別当に任官、菊花十六紋章の緋衣をつけて奉仕を続けてきたという。

しかし、明治元年の太政官布告、いわゆる神仏分離令の発布によって、一千有余年間行われてきた神仏混淆の信仰が禁止されたため、第五十九代別当観空の代を最後に当山から別当職はなくなり、仏教色がすべて取り除かれることになるのである。

これら五十九代の別当さんたちの御霊が鎮まるところが、別当墓地（写真）である。なかには五輪塔もあるが、写真のように井戸枠形に石を組み、中に人の頭ほどの丸石を安置しているものが大多数を占めている。いわゆる塔頭（たっちゅう）と呼ばれるもので、当地方では貴重な墓石群といえるものである。なかには丸い石に、別当の名を刻んだものもある。

このような、当宮の深い仏教との関わりから毎年五月十七日、神仏両道による先人等の慰霊祭を執行してきている。「別当宮司先賢慰霊祭」がそれである。当日は歴代別当、宮司の墓前に遺族が並び、御霊なぐさめの祝詞の次には、住職の読経が続くという神仏習合時代さながらの風景がくりひろげられ、二千有余年のあいだこの鵜戸山を守り、その発展に寄与された師徳を崇い、功績を称えるのである。

（本部）

編集後記

南国宮崎は、すっかり夏の状を呈して参りました。霊峰・速日峯も緑の色をますます濃くしております。皆様如何お過しでございますか。

ここに社報第十一号をお届け致します。

今回は先に執り行われました例祭と、その奉祝行事を中心に、ヨーロッパ旅行と、タイ国訪問の紀行文とを併せて記載してみました。

外国（人）の風物、物の考え方などを、その地を訪れた人から聞いたり、また実際に異国の地を踏んでみると、改めて我が国に生を享けた喜びを感じ取ることができます。あわせて、外国から我が国や故郷のことを眺めることによって、その長所、短所を見つめられることができます。こういった機会は、自分自身の思想、信条、生き方を問い直す絶好の場でもあります。

外国といえば、いま我が国は尖閣列島、北方領土などの重大な外交問題を抱えております。これらの諸島は、我が国固有の領土であることはもちろんでありますが、先祖より受け継いで来た領土を目さきだけの政策のとりひき材料にすることは、断じて許されるものではありません。

（本部）